

平成24・25年度
平塚市社会教育委員会議 報告書

～社会教育における
子ども達の生きる力を育む方策について～

(提 言)

平成26年3月
平塚市社会教育委員会議

社会教育における子ども達の生きる力を育む方策について

目 次

はじめに	・・・ P. 1
Ⅰ. 今、生きる力を育むために求められていること、育てたい力とは	・・・ P. 3
Ⅱ. 学校・家庭・地域の役割と連携・協力の方向性	・・・ P. 5
研 究 調 査	
1. 地域活動の取り組み例と今後に向けて	
(1) 平塚市の社会教育関係の取り組み例（子ども達を中心にした事業）	・・・ P. 8
(2) 地域教育力ネットワーク推進事業及び活動事例	
① 地域教育力ネットワーク協議会の活動について	・・・ P. 10
② 活動事例	・・・ P. 12
③ 活動内容についての調査結果（平成24年度）	・・・ P. 14
(3) 事例から見えてくる今後の地域活動へのアドバイス	・・・ P. 16
① 中学生のボランティアを積極的に活用すること	
② 子ども達が企画、運営に参加すること	
③ 参加できない子ども達への働きかけ(参加を促す手立て)	
④ 子ども達が活動の振り返りをする	
⑤ 広報活動の充実	
⑥ 行政の支援について	
2. 地域や学校をサポートする社会教育	・・・ P. 18
(1) 地域の人材やボランティアの活用の推進を図る	
(2) 子ども達への芸術文化の体験を推進する	
(3) 地域における子ども達の学びや体験活動の充実を図る	
(4) 地域が支えるキャリア教育（職業体験の充実）	
(5) 子ども達の生きる力を育む公民館	
おわりに	・・・ P. 21
平成24・25年度 平塚市社会教育委員名簿	・・・ P. 22
《資料》 地域教育力ネットワーク協議会の活動事例	

はじめに

この提言書は平成24・25年度の社会教育委員15名が2年間にわたり研究調査してきたものである。メンバーの構成としては、社会教育委員を初めて経験する10名と、前からの継続者5名である。これまでの10回の会議の中で、私達は、社会教育委員としての役割を学びつつ、テーマを設定して話し合いを進めてきた。

テーマ設定に当たっては、まず、「今、社会教育の視点から取り組むべき課題は何か」ということをそれぞれの立場（所属団体や地域、学校、社会）から出し合い、次のように現状を捉え（2ページ）、「社会教育における子ども達の生きる力を育む方策」について取り上げ、提言をまとめることにした。

研究対象としては、行政の管轄や、子ども達の学区、行動範囲を考えて、小・中学生に絞り検討した。

本研究が、子ども達の生きる力を育み、さらには地域づくりや地域の活性化に貢献することを願っている。

平成24・25年度平塚市社会教育委員会議

議長 大橋 千賀子

【現状の捉え】

子ども達

生活習慣の乱れ、体力の低下、規範意識の希薄化、いじめ等の問題行動、学力の二極化、将来への希望がもてないことによるやる気の無さ、コミュニケーション能力不足、自立できない等、様々な課題がしばしば指摘される。

たとえば、相手のことを思いやれずに自分が面白ければいいという短絡的な行動をしてしまったり、うまく自分の思いを伝えられず突然きれたりする。また、ゲームで育っている子ども達の中には、集団遊びが苦手で、限られた仲間ではしか遊ばなかったり、おもちゃやゲーム機などの道具がなければ遊ばなかったりする子ども達も見られ、増加傾向でもある。

学校

学習指導要領の改訂に伴い、授業時間数が増加し学習内容が多岐にわたっている。言語活動の充実、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動の充実、学力の向上を図ることや心の教育も重要な課題である。

学級崩壊や児童生徒の問題行動への対応、問題を抱えた保護者への対応等様々な問題を抱え、学校だけでは対応に限界がある。

家庭

少子化や核家族化で兄弟や祖父母等の身近な存在が少ない家庭が多くなってきている。地域での人間関係も希薄で、親子だけ、家庭だけという限られた人間関係の中で生活している子ども達もいる。

血縁や地縁的なつながりの希薄化などを背景に、子育てに不安を抱えたり、孤立感を募らせたりしている保護者も増加している。また、地域の自治会組織への未加入者や子ども会活動へ消極的な保護者もいる。

悲しい現実としては、子ども達への虐待等通常考えられないような事件が家庭の中で起きていることもある。

地域

地域における人間関係の希薄化が進み、多くの大人達の社会参加意識が薄れたり、地域の教育力の低下を実感している。隣人が何をしている人か分からないどころか顔も合わせない、あいさつもしないといった状況も今では珍しくなくなってきている。子ども達が地域で遊んだり活動したりする姿も減り、地域が安心安全な居場所ではなくなってきている。また、災害が起きた場合等、地域の支え合いが機能するかも疑問視される。

I. 今、生きる力を育むために求められていること、育てたい力とは

学校では

- 問題解決能力とコミュニケーション能力の育成
- 相手を思いやり、他者を認める心の育成
- いじめ問題等への対応
- ボランティアや地域活動を通し、人との結びつきを深めること
- 自然体験を通じた学び
- 成功体験ができる場の提供
- キャリア教育

家庭では

- 親子が共に愛を実感すること
- 子育ての悩みを抱える親達への支援
- 年代を超えた気づき合い
- 子ども達に達成感を与える場の提供
- 閉鎖された家庭の中で今起きていること（虐待等）への対応
- 保護者の教育力の向上
- 地域活動への参加

地域では

- 好縁や地縁社会の形成
- ボランティアや地域活動に誰もが参加しやすい環境づくり
- 子ども達と大人達が一緒に学ぶこと
- 地域活動に関心がない層（子ども達も大人達も）への対応
- 地域との関わりあいの中で体験する場の提供
- 自然に触れた体験と地域と関わるコミュニケーション体験
- 子ども達を支援することを通し、大人達の社会教育活動の活性化を図ること
- 大人達が地域活動に参加する意識を高めること
- 生活体験をどのように共有するか
- 体験する場をどのようにつくっていくか
- 年齢に応じて色々な体験をすること
- 公民館等の社会教育施設の有効利用
- 通学合宿のようなモデルケースを増やすこと

親も子どもも学ぶ…
豊かな体験…
自然体験…

地域や人とのつながり…
地域活動に参加する…
世代を超えた関わり…

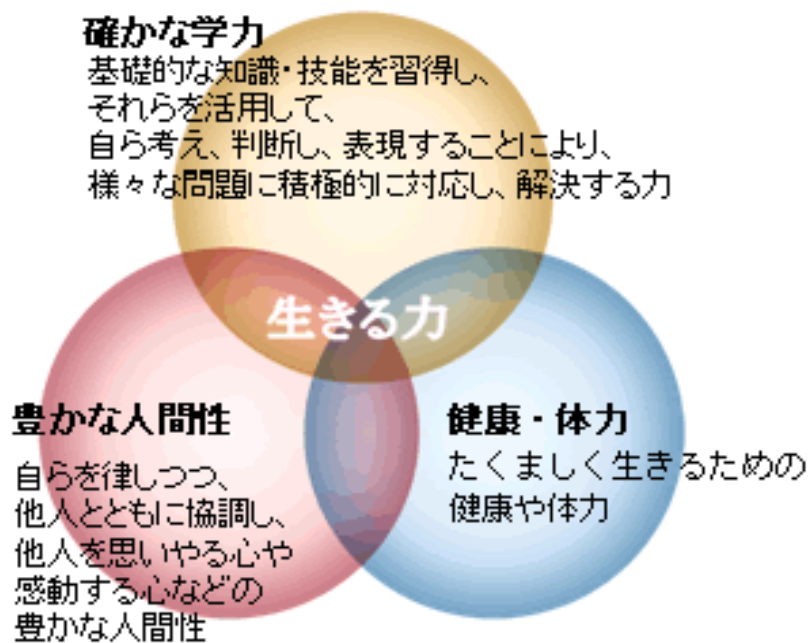
育てたい力

問題解決能力とコミュニケーション力
思いやる心
自尊感情、自己肯定感、達成感
子ども達の市民性(大人達も)

参 考 生きる力とは=知・徳・体のバランスのとれた力

～「文部科学省ホームページ 新学習指導要領より」～

- 基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え判断し表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力
- 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性
- たくましく生きるための健康や体力



Ⅱ 学校・家庭・地域の役割と連携・協力の方向性

～社会教育の視点から～

学校・家庭・地域 が 連携・協力し、

子ども達の生きる力を育んでいこう

学 校

- ・地域資源（人・もの・こと）の積極的な活用を進める
- ・地域をよりよく知り、子ども達の職業観・勤労観を培う
- ・ボランティア活動による子ども達の社会参加を充実する

家 庭

- ・子ども達の規範意識の基盤を作る
- ・保護者自らが地域との関係づくりを進める
- ・親も子どもも共に社会活動・地域活動に参加する

地 域

- ・地域人材の発掘・育成を行う
- ・子ども達に多様な体験の場を提供する
- ・地域全体で子ども達を育む環境を作り、地域ぐるみで学校支援を図る

参 考

教育基本法第13条

学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。

社会教育法第3条第3項

国及び地方公共団体は、第一項の任務を行うに当たっては、社会教育が学校教育及び家庭教育との密接な関連性を有することにかんがみ、学校教育との連携の確保に努め、及び家庭教育の向上に資することとなるよう必要な配慮をするとともに、学校、家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することとなるよう努めるものとする。

☆ 社会教育における子ども達の生きる力を育むキーワードは ☆

「つながり・創造・感動」

地域教育力ネットワーク推進事業報告をもとに、事業内容や子ども達の生きる力について具体的に検討する中で、共通の視点（キーワード）として「つながり・創造・感動」という言葉があげられた。

子ども達は活動を通し、地域の人々と繋がり、新たな地域の文化を創造し、様々な感動を味わう。また、主体的な学びや新しい取り組みが展開され、地域や人々との絆が深まり、生きる力につながっていくことが期待される。

このキーワードの根拠となる主な意見は以下の通りである。

【会議での意見より・・・】

第5回会議より

- 今までの意見を聴いていると、生きる力を育むためには、人との繋がりを大事にすることが必要だ。繋がりは、共に地域文化を創造していく中でこそ深められ、その結果一人ひとりの心の中に感動が生まれる。「つながり・創造・感動」の一連の流れを体系化し、事業等見直す視点が出てくるとよい。
- 「つながり・創造・感動」という一連の流れの中に、問題解決能力やコミュニケーション能力、人を思いやる心、自己肯定感など組み込まれていくのではないか。今現在、各地区が創り上げた文化や活動は素晴らしいものがあるが、拡散しているから見えづらい部分がある。「つながり・創造・感動」を視点にそれらの活動の意味を明らかにしたい。
- 文化活動をしている人は、感動を体感する機会に恵まれている。たとえ分野は違っても、感動は色々な広がりをもつので、「つながり・創造・感動」を体験する機会は大切だ。

第7回会議より

- 地域教育力ネットワーク協議会では、地域の方々が沢山の事業に取り組んでいる。その中で、地域の人々の「つながり」を築きあげ、様々な「感動」を生みだしているのではないか。小・中学生、ボランティア、地域の方を含め多くの人が参加している事業もあるが、行事をこなすためのエネルギーだけで終わってしまっただけでは意味がなく、事業を

やるのが新たに何を生み出したかというまさに「創造」の部分の大事になってくる。たとえば、富士見小学校では地域の協力を得て蛍を飼育している。地域の人にも蛍を観てもらおうと観賞会を実施しているが、ただ鑑賞会を実施するにとどまらず、その観賞会を盛りあげようと音楽会を同時に開催するなど新たな地域文化を創造しようとしている。そのような動きは、「つながり・創造・感動」がうまく関わり合っており、非常に素晴らしい。

- 富士見小学校の蛍の飼育は、子ども達の「蛍を見たことない」、「蛍を飛ばしたい」という思いから始まったものである。小学校の中庭にビオトープを作り、地域の協力で維持管理し、毎年盛大に観賞会を開催している。その中で、子ども達が自主的にミニコンサートがやりたい等様々な提案をして実現しているので、とても良い取り組みである。
- 学校だけでなく地域で世代を超えて行事が行われている。そこでは世代を超えた「つながり」が生まれ、そこから色々なことを「創造」し、子ども達も大人達もそれぞれが「感動」を味わうことができる。
- 物事を創り出すことから始まり、いかに活かしていくかという視点は大切である。
- 地域教育力ネットワーク協議会では継続して行っている事業が多いことに感心したが、そもそも活動が始まったきっかけは何だったのか。蛍の観賞会の話でもあったが、おそらく最初は誰かが「やってみたい」と思ったところから始まり、それをどのように形にするかというプロセスが人の繋がりを創ってきた。今一度、継続してやっている事業の意味を見直し、スタート時点を見るのも必要ではないか。
- 地域教育力ネットワーク協議会の実施報告書を見ると、実施する人の視点で作成されているので、子ども達がどのように思ったのかという視点が入るとそれが次に繋がる創造になる。

研 究 調 査

1. 地域活動の取り組み例と今後に向けて

(1) 平塚市の社会教育関係の取り組み例(子ども達を中心にした事業)

社会教育課

事業名	事業目的・内容
地域教育力ネットワーク推進事業	子ども一人一人の自立と「生きる力」を育むため、各中学校区地域教育力ネットワーク協議会において、地域の特色をいかした世代間交流、体験事業等を推進するほか、こどもサポート看板の設置、夜間パトロールなどの共通事業を行う。
放課後子ども教室推進事業	放課後や週末等の子ども達の遊びや学びの場として、小学校の余裕教室などを活用し、地域が主体的に実施している学習やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動などの取り組みを推進する。
子ども大学ひらつか(奏アカデミー 東海大学)	小学校4・5・6年生を対象に、普段の学校の授業では学べないような大学ならではの実験中心の講座を、東海大学との連携により実施。子ども達の知的好奇心や感性を育てることを目的とする。
子ども大学ひらつか(奏アカデミー 神奈川大学)	小学校5・6年生を対象にネイティブスピーカーの講師と英語でのコミュニケーションを楽しく学ぶ「大学で学ぶ英会話入門講座」を神奈川大学との連携により実施。世界に羽ばたく子ども達を育てることを目的とする。
芸術文化子ども体験事業	次代を担う子ども達が、長い歴史と伝統の中から生まれ守り伝えられてきた貴重な財産である芸術文化を体験。(琴、生け花、日本舞踊、マジック等。) 歴史、伝統、芸術文化に対する関心や理解を深め、豊かな人間性を育む機会を提供することを目的とする。
文化財写生コンクール	中学生以下の幼児・児童・生徒を対象にした写生コンクール。市内の文化財や文化遺産の写生を通して、地域の歴史に親しむこと、また将来にわたって末永く保存していくという意識を高めることを目的とする。
埋蔵文化財調査事務所普及啓発事業	市内の小・中学生を対象とした体験型講座「親子勾玉づくり教室」及び「土器の拓本をとろう教室」を実施。文化財に対する愛護意識の普及・啓発を目的とする。

公民館関係

事業名	事業目的・内容
児童・生徒地域参加事業	異なる学年の児童・生徒が集まり、様々な創作活動や体験学習などを通して、集団生活や規律について学ぶとともに、地域の人々との交流を深める。
家庭教育学級・家庭教育講演会	幼児や児童・生徒を持つ保護者を対象に、親として心身ともに健全で豊かな人間性と創造性を持ち、主体的に行動できる人間像を目指して、子ども達を取り巻く諸問題等について相互学習する。
地区公民館各種事業	親子星空観察会・料理教室など親子または子ども同士で参加でき、ふれあいを深め合う場を提供することを目的に、各公民館が特色ある内容の事業を企画・実施する。
一日大学生	神奈川大学、土屋小学校又は土沢中学校、土屋公民館との交流事業で、大学の最先端の施設で授業を体験するとともに、大学の教員・学生との交流を図る。

その他

事業名	事業目的・内容
小学校プール開放事業 学校体育施設開放事業 【スポーツ課】	児童の心身の健全な育成と泳力の向上を図るため、夏季休業中の市内28小学校プールを開放している。 市民にスポーツをする場所を提供することを目的として、教育上支障のない範囲で小学校28校と中学校15校の体育施設を開放している。
サッカー文化の振興によるまちづくり事業 【スポーツ課】	サッカー文化を振興するため、湘南ベルマーレによる小学校巡回授業やトレーニングセンターへのコーチの派遣等を実施している。
子ども読書活動推進事業 【中央図書館】	各中学校区子ども読書活動推進協議会を中心に、家庭・地域・学校・行政とが連携し、全市的な読書活動を推進している。
市民の図書館体験事業 【中央図書館】	市民が図書館業務を理解し、関心と意欲を持てるようにするため、小学生の一日図書館員体験事業等の図書館業務の体験を実施している。
来館出来ない人への図書館サービス事業 【中央図書館】	図書館に来館出来ない人のために、移動図書館車で、児童施設や入所施設、図書館から遠い地域の学校、公民館などを訪問し、図書の貸出をしたり、公共施設での本の返却ポストの設置をしている。
博物館教育普及活動推進事業 【博物館】	地域の歴史・自然について、講演会、講座、野外観察会、体験学習を実施している。
プラネタリウム学習投影事業 【博物館】	学校の教室では教え方が難しい星の動き、月の満ち欠け、太陽の季節変化などを自在に表現することができるプラネタリウム投影を通して、学習の理解を深め、宇宙や天文への興味・関心を高めたり理科好きな子ども達を増やすことにつなげている。
美術教育の普及・体験事業（ワークショップの開催） 【美術館】	美術に親しむ人々の拡大と美術に関する学習活動や体験を目的に、子ども達・親子や成人を対象としたワークショップを行っている。また、小・中学生のうちから美術への関心を高めるため、アートカードを利用した美術鑑賞教育の充実を図り、学校との連携を進めている。

(2) 地域教育力ネットワーク推進事業及び活動事例

地域教育力ネットワーク協議会は、今回の社会教育委員会議において取り組む「生きる力」について取り組んでいる組織なので、より詳しく内容を調査した。「24年度地域教育力ネットワーク推進事業報告書」や「社会教育委員（平塚市地域教育力ネットワーク協議会の会長や地元）からの説明」、「実際の見学」等を元に話し合った。そして、注目した平成25年度の活動事例の紹介、「24年度地域教育力ネットワーク推進事業報告書」の分析、さらにこれからの活動へのアドバイスをまとめた。

① 地域教育力ネットワーク協議会の活動について

経緯

・ 中学校区非行化防止推進団体の発足（昭和56年度～59年度）

地域の各種団体の代表を構成メンバーとし、青少年健全育成、非行化防止のため、地域に密着した実践活動を推進するための調整機能を持つ組織を発足させた。



・ 平塚市中学校区青少年健全育成連絡協議会の発足（昭和60年度～平成7年度）

各中学校区の組織化と連絡調整機能を重視した指導を行うと共に、各種団体との調整機能に加え、その地域の特殊性を盛り込んだ実践活動に着手していく。

各中学校で実践している活動報告、情報交換、県内宿泊研修及び少年の主張作文・あかるい家庭写真の募集を行うなど各地区の組織及び活動の強化を図った。



・ 平塚市中学校区青少年健全育成連絡協議会の見直し（平成8年度）

学校週五日制の完全実施や、いじめ・不登校などの課題を見据え、学校を含めた地域社会の中で子ども達が「生きる力」を育むネットワークづくりを推進するため、そのあり方の検討を進める。



平塚市地域教育力ネットワーク協議会発足 **（平成9年7月9日）**

名 称 平塚市地域教育力ネットワーク協議会

目 的 地域社会の中で、子ども達が世代間交流、生活体験、社会体験、自然体験、ボランティア体験などを積み重ね、「生きる力」を育むことができるよう、次世代を担う子ども達の教育環境づくりをめざした地域教育力のネットワークづくりを推進する。

主管課 平成 9年度～平成13年度⇒学校教育部 指導室（現在：教育指導課）
平成14年度～現在 ⇒社会教育部 社会教育課

組織体系

平塚市地域教育力ネットワーク協議会定例会（代表者会議）

15 中学校区代表者、健全育成協力者会、学校代表者、関係課

各中学校区の地域教育力 ネットワーク協議会

自治会、小学校・中学校、公民館、青少年指導員、青少年補導員、少年補導員、防犯協会、民生委員・児童委員、PTA、子ども会育成会、PTAや子ども会育成会のOB、交通安全協会、体育振興会、ボーイ(ガール)スカウト指導者、保護司、学童保育会、社会福祉協議会、子ども達に関する市民活動団体等、それぞれの地区の状況により構成は異なる。

〇〇小学校区地域教育力
ネットワーク協議会

〇〇小学校区地域教育力
ネットワーク協議会

※中学校区の中に、さらに小学校区ごとの教育力ネットワーク協議会がある地区もある。

② 活動事例

事例1 通学合宿（金目地区）

概要	金目地区の小学生（4・5・6年）が金目公民館から小学校に通う2泊3日の生活体験をする。平成15年度から実施されている。
目的	子ども達の社会性、自主性、協調性を伸ばし、生きる力や思いやりの心を育てる機会とする。自らの生活経験を豊かにし、家族愛や家庭へのまなざしを深めることができる。
内容 (25年度)	小学生40人、中学生13人（ボランティアとして）、運営スタッフ64人が参加。 小学生は食事作り、買い出し、近くの家でもらい湯、掃除といった体験をする。中学生は運営側にボランティアとして協力し、参加小学生と屋内スポーツやゲームをするとともに、世話をしたりすることで地域行事に積極的に参加する。大学生もボランティアとして参加した。

事例2 郷土いろはカルタ大会（港地区）

概要	港地区の郷土いろはカルタ大会。 昭和54年から30年以上継続して実施されている。
目的	競技中の礼儀作法を練習段階から身につける事により、人間成長の一助とする。世代間交流や、子ども達が郷土愛を育み、礼儀作法の自然習得を目指す。中学生ボランティアは、自分が小学校の時選手として参加した経験を活かして参加することで、地域指導者としての第一歩となることを目的とする。
内容 (25年度)	小学生272人、中学生30人（ボランティアとして）、運営スタッフ90人が参加。 港小学校の児童を選手とし、地域で手作りの郷土カルタを学年別に取り合う個人競技。予選・準決勝・決勝と進む。読み札は太洋中学校の生徒がボランティアで読む。中学生は1カ月前に読み札を受け取り、自宅練習。事前練習は子ども会単位（8単位）ごとに4回程度行っている。

事例3 中学生ボランティア派遣事業（大野地区）

概要	大野地区の中学生がボランティアとして地域社会へ主体的に参加する。地域からの受け入れ計画書に基づき、生徒が自主的に参加を表明する。 平成22年度から継続して実施されている。
目的	様々な世代と交流し色々な体験を積み重ねることで「生きる力」を育むとともに、地域におけるネットワークづくりをする。
内容 (25年度)	中学生14人が参加。(平成26年1月現在) 豊田地区敬老祝賀会手伝い、松が丘小ふれあい広場手伝い、とまれ足型マーク塗布手伝い、ドッジボール練習相手、道祖神祭だんごづくり、公民館祭りバザーと募金、防災訓練誘導等でボランティアを行っている。

事例4 横内マイタウンスクール（横内地区）

概要	週末、横内地区の小・中学生が文化系やスポーツ系等、様々な活動を実施。平成14年度の学校週5日制の開始に合わせて発足し、継続して実施されている。
目的	小・中学生を対象に、地域の指導者が文化系、スポーツ系のサークル活動を提供することにより子ども達の居場所づくりや、個人の技術や資質の向上を図る。 様々な体験を通じて社会性・自律性を持ち、自分の可能性を見つけていけるような「地域の学び場」としての役割を持つ。
内容 (25年度)	小学生80人、中学生10人、運営スタッフ20人が参加。(見込み数) 陸上；月4回 ハイキング；年2回 ジュニアバンド；月1～数回 和太鼓；月1回 囲碁将棋；月2回 茶の湯；月1回 フラワー教室；年2回 講師、指導者は地区のボランティアや保護者が行い、世代間交流もしている。

事例5 防災キャンプ（崇善地区）

概要	崇善小学校の小学生を対象に実施される災害体験学習。平成15年度から実施されている。
目的	子ども達が防災体験を通じて、防災に関する知識を身につけ、他学年交流や地域の様々な人と顔見知りになる。大人達も地域の子どもの顔を知り、地域全体で子ども達を育てる、守るというような意識を醸成するねらいもある。
内容 (25年度)	小学生33人、中学生2人、運営スタッフ43人が参加。 平塚市消防署等の協力で、起震車、放水体験、はしご車の乗車などを体験。 昼食は自衛隊のカレー。ボランティアで参加した中学生がカレーをよそい参加者に配ったり、小学生の引率を行った。夕食は非常食を食べ、段ボールハウスを作成して体育館に宿泊した。翌朝は、津波のビデオ鑑賞の後、校舎屋上に上がり津波の避難訓練をした。

③ 活動内容についての調査結果(平成24年度)

- 24年度の実践を調べても、平塚市全体で40件近い取り組みが行われており、各地区の地域の特色や工夫がある。また、平塚市が子ども育成のための地域のネットワークづくりに早くから取り組み、地域に根付いた歴史ある活動となっていることを改めて認識する。

- 内容を整理すると次のようなものがある。
 - カルタ大会、スポーツ、お祭り、老人ホームの慰問、植物に関すること、防災キャンプ、広報紙発行、映写会、学区を回る(通学路散歩、ゴミ拾い、宝探し)、通学合宿、自転車点検、七夕竹飾り、マイタウンスクール、灯ろう流し、ボランティア派遣事業、サイバースクール等である。

- 中学生がボランティアで関わっている事業は22件である。様々な事業で中学生ボランティアが活躍している。
 - ・親代わりに小学生に付き添ったり、率先して手伝ってくれたり中学生ボランティアの活躍で地域は助かっている。
 - ・回数を重ね、色々なことでボランティアへの参加を促すことが大切である。
 - ・感謝や期待される喜びを味わってほしいという感動教育を行っており、地域でのボランティア活動や自治会などの活動に参加を推進している中学校があった。活動に参加している生徒は、言葉遣いや態度も良く円滑にコミュニケーションを図ることができる傾向にある。**(事例2)**
 - ・友達に誘われて小学生のマラソン大会の伴走ボランティアへ参加した内気な子どもが、ボランティアに参加したことで以前よりも積極的な性格になり、人生が変わるきっかけになった例もある。
 - ・大野地区のボランティア派遣事業は、地域教育力ネットワーク協議会を窓口としたボランティア要請ということで、中学校としても安心して生徒にボランティアを投げかけることができる。「要項」や「受け入れ計画書」でボランティア派遣のシステムや内容が明記され、利用しやすく工夫されている。**(事例3)**

- 子ども達が事前会議や準備に関わっている事業は18件ある。「事前会議に参加」は14件、「活動の振り返りを実施」は12件、「当日のみ参加」は11件
 - ・運営を子ども達に任せることによって、子ども達は体験を通し、自信を持って次のステップに進むきっかけになっている。

- 地域の他の団体との共催は17件である。

- 事業の実施回数は、年に1回行われているものがほとんどである。
 - ・ 全一日が24件、ナイトハイクや防災キャンプなど全二日間実施が3件、通学合宿は全三日間、豊田敬愛ホームの慰問活動は全四日間である。

- 10年以上続いている事業は11件ある。
 - ・ 金目地区の通学合宿もその一つだが、継続できた要因の一つに、組織メンバーに長年金目の地域活動に携わってこられた方々が多いことがあげられる。地域指導者の継続的な存在があることで、子ども達と地域のつながりが日常化しやすい。**(事例1)**
 - ・ 港地区のカルタ大会は35年続いており、地域にしっかり根付いた地域全体の行事となっている。**(事例2)**
 - ・ スポーツではナイトハイクなど手軽には経験できない、大人達のサポートが不可欠なものも5~8回続いている。子ども達にとっては貴重な経験である。

- 通年行われている取り組みは4つある。
 - ・ 大野地区のボランティア派遣事業 **(事例3)**
 - ・ 横内地区のマイタウンスクールは、子ども達が主体的に文化系やスポーツ系の好きな分野の体験教室を選択し、継続して取り組む事業として注目される。**(事例4)**
 - ・ 金目地区の子ども広場(栽培や収穫・体験)や花植え、サイバースクール(青少年健全育成)。

- 防災キャンプの取り組みは5件だが、自治会で取り組んでいる地区もある。
 - ・ 崇善地区では地域教育力ネットワーク協議会や父の会、学校、ひらつか防災まちづくりの会、さらに自衛隊の協力で、2日間に渡り子ども達に豊かな災害体験学習を行った。**(事例5)**

(3) 事例から見てくる今後の地域活動へのアドバイス

① 中学生のボランティアを積極的に活用すること

調査結果にあるようにボランティア活動は、人との関わり、主体性、働く喜び、役立つ喜びやコミュニケーションの力を養う良い機会である。地域の事業に中学生のボランティア活動ができるような場面や役割を、意識して積極的に組入れるようにしたい。当日の活動に参加してそれで終わりになっているケースもあるが、それまで参加者だった子ども達がボランティアとして関わるといった社会貢献に発展させているケースもある。今後さらにそのような生徒が増えることを期待する。

② 子ども達が企画、運営に参加すること

子ども達の主体性を育てるためには、忍耐と時間を要する。時間がかかっても、事前の企画や準備に、子ども達が関わり、発言したり、地域の大人達と共に働いたりすることが大事である。その中でコミュニケーション力も培うことができる。また、自分達の事業という思いが、意欲、やりがい、感動や喜びにつながっていく。地域の一人としての自覚を育てる良い機会でもある。

③ 参加できない子ども達への働きかけ(参加を促す手立て)

性格(引っ込み思案やコミュニケーションが苦手等)、家庭や子ども達の事情(親の理解、小さい兄弟がいる、障がいがある、外国籍で言葉の壁等困難を抱えている等)、関心の薄さや周知が徹底されていない等、参加できない要因は様々である。

子どもも大人も一緒に活動して、お互いに楽しむ経験を積むことで、色々な人とながり、人間関係を築くことができる。まず、参加できることが第一歩である。

参加できない子ども達やその家族を把握して、彼らとのあいさつを初め日ごろの関係づくりを大切に、根気強く周囲の人々が声を掛け合う必要がある。また、イベント当日だけの関わりで終わりにせず、その後に人間関係をつなぐ努力が必要だ。

地域の活動に、親が率先して関わる姿勢や働く姿勢は、子ども達の手本になる。できるだけ子ども達が小さいときから大人達が地域に目を向けることが大事である。学校とも連携して校長講話で話してもらったり、先生方にも参加を働きかけてもらったりすることも効果的である。

④ 子ども達が活動の振り返りをする事

子ども達を中心の事業では、子ども達の声を大事にしたい。周囲の人々との関わりや、どんな活動ができたのか、どんな感動が持てたのか、「つながり・創造・感動」の視点を子ども達に投げかけたい。振り返りを通して自己認識を深め、達成感や自信、自己肯定感にもつながっていくはずである。また、その声を次の企画や内容の改善にも発展させることができる。

⑤ 広報活動の充実

広報活動も充実させたい。今期の会議中で、「市内全域に地域教育力ネットワーク協議会全体の活動に焦点をあてたPRをしてほしい」と提案した。それを受け事務局が働きかけ、平成26年1月第3金曜日号の『広報ひらつか』の1面から3面に地域教育力ネットワーク協議会の活動の特集が組まれた。

今後も積極的な情報発信、ホームページ（インターネット活用）、広報活動の充実を図り、地区や市内の情報の共有化を図ってほしい。一人でも多くの市民に地域活動を知ってもらうことで、その市民が新たな参加者となり、地域活動の活性化に繋がる可能性もあわせて期待したい。

⑥ 行政の支援について

誰もが参加し易く、また、企画や内容が充実をした事業にするためには、行政の支援（活動資金面、後援、評価や指導助言等）が切望される。

地域における芸術・文化活動の活性化や伝承のためにも、行政の後ろ盾があるか否かが重要となる。行政がバックアップをしていることで、市民が安心して活動に参加できる風土・環境を作ることができる。

また、地域教育力ネットワーク推進事業のような運営者や参加者の評価項目の書式があると、複数の目で評価することができ、事業改善に向けて効果的である。

さらに、社会教育としての専門的な指導助言により、地域の活動はより充実していくと思われる。新しい公共の考え方を初め、これからの社会教育における地域活動の在り方等についてどのように考えていったらよいか、地域の事業の方向性について具体的な指導助言が必要である。

2. 地域や学校をサポートする社会教育

(1) 地域の人材やボランティアの活用の推進を図る

地域は人材の宝庫である。スポーツや芸術文化を初め、多種の専門性の高い人や人生経験の豊かな人がある。一方、学校は多岐にわたる教育内容や様々な教育課題が山積しており、学校だけでは対応しきれない現状である。学校と家庭・地域の連携・協力が不可欠である。

そこで、学校教育におけるニーズや、地域の人々が学校に対し協力したいこと・できること等に応じて、学校支援や協力体制がし易いシステムづくりが望まれる。学校においては教員が積極的に地域の人材やボランティアを活用し、地域と連携・協力して教育効果を高めようとする意識や重要性を認識することが望まれる。

具体的な取り組み例として、今期の会議中に提案し、早速、平成25年度より実施に至った芸術文化講師派遣事業（各小・中学校からの要請によって、平塚市文化連盟に所属する芸術や文化に関する講師を派遣する事業）がある。平成26年度以降も引き続き実施していただきたい。

また、地域をサポートする社会教育の立場から、今後は学校と公民館等が連携し、地域の人材バンクや地域ボランティアを充実させていきたい。前述した地域教育力ネットワーク協議会のようにボランティアとして地域の様々な世代の参加が望まれる。“地域の人”と“子ども達の学習や体験の場”を繋げることによって、子ども達の学びが豊かになっていくだけでなく、地域が活性化し市民生活も豊かになると考える。地域と学校の橋渡しをする役割・機能が必要である。

(2) 子ども達への芸術文化の体験を推進する

平成24年度から横内公民館で子ども達の芸術文化体験事業として琴、生け花、日本舞踊等の講座がスタートしたところであるが、平塚市文化連盟などと連携し今後さらにその推進を図り、子ども達が日本の伝統文化等にふれる機会を身近なものになるよう推進していただきたい。

新学習指導要領においても、伝統や文化に関する教育の充実が求められている。

- ・ことわざ・古文・漢文の音読など古典に関する学習を充実（国語）
- ・歴史教育、宗教、文化遺産(国宝、世界遺産等)に関する学習を充実（社会）
- ・そろばん・和楽器・唱歌・美術文化・和装の取り扱いを重視
- ・武道を必須化（保体 中1・2）
- ・「総合的な学習の時間」の学習例示として、地域の伝統と文化を追加（小）

※新学習指導要領 小学校は23年度から、中学校は24年度から実施。

地域の諸団体との連携・協力を図り、より多くの公民館などの社会教育施設や学校等で実施することが望まれる。各学校には前述の芸術文化講師派遣事業等を利用したり、また、「特色ある学校づくり」として芸術鑑賞費が予算化されているので積極的に地元等の活動団体を活用したりするよう呼び掛けたい。また、子ども達だけでなく、大人も一緒に参加し、芸術文化を楽しむ機会になることがより望ましい。

(3) 地域における子ども達の学びや体験活動の充実を図る

地域教育力ネットワーク協議会を初め、地域の諸団体が、子ども達のための事業に取り組んできているが、子ども達の問題、家庭の教育力や地域の教育力の低下等は深刻化している。

地域の大人達が、もっとわが子や地域の子どもの達に目を向け、このままではいけないという問題意識を持ち、話し合い、地域としてアクションを起こすことが望まれる。

地域全体で子ども達を見守り育てていくような仕組みについて、既存の組織や活動に任せきりにしないで、新たな視点での改善や取り組みが必要である。

各地区で地域の人達とのふれあいを通し、子ども達の学びや体験活動がより活発になることが望まれる。活動例として、「八幡の放課後子ども教室」や、「吉沢の寺子屋」、「公所自治会の子ども育成部」（自治会が主体となり、子ども達に様々な体験事業を提供）や「中原のおもしろ理科教室」などの取り組みが本会議でも話題になった。他にもよい実践がなされていると思われるが、他地区でも参考にしてほしい。

地域の大人達にとっても、経験や専門性、公民館や既存の社会教育施設での学びを子ども達に伝えていくことは、学びを深めたり生きがいとなり、お互いが学び合う機会になる。

(4) 地域が支えるキャリア教育（職業体験の充実）

今日の大きな教育課題として、「キャリア教育や職業体験の充実」が求められている。それは、幼児期から始まっていて、色々な人とのふれあいや様々な経験が大事である。小学校や中学校のカリキュラムの中でも働く人との関わりや、職場見学や体験等があり既に実施されているが、さらなる充実をめざしていただきたい。

親が働く姿を見せたり、保護者や地域の人が学校に行って、社会人や職業人としての経験を話したり、地域の店や企業等が積極的に子ども達を迎え入れ、見学や体験する機会を提供していくことは、教育的に極めて効果的である。子ども達にとって実感を伴う学びであり、生きる力になっていくからである。大人達にとっても子ども達に教えながら自ら学んだり、学校にどのように協力ができるか話し合ったりすることで、連帯感が持てたりする。また、地域の教育力向上につながる。

キャリア教育や職業体験の充実を図るためにも、地域に学校支援の窓口やコーディネーター等の人的役割が不可欠である。また、学校においても地域担当の配置やキャリア教育や職業教育の推進役の配置が望まれる。幅広い枠組みの中で、たとえば農業協同組合や青年会議所等と教育委員会や学校が連携したシステムづくりができればさらに良いと思う。

(5) 子ども達の生きる力を育む公民館

公民館では、児童・生徒地域参加事業を初め、子ども達に生きる力となる色々な体験学習が行われている。また、家庭教育学級のように間接的ではあるが子ども達のためになる事業もある。今後も継続して、より充実させていってほしい。

また、公民館は社会教育の拠点である。学校や家庭と連携・協力して、地域の活性化を図ることが期待されている。今年度、地域コーディネーター（※）の育成のための講座が中央公民館で5回開催され、約30人が受講した。彼らの活躍が地域の発展や活性化につながっていくと思われるので、今後さらに地域コーディネーターのような人材の育成に力を入れてほしい。

※ 地域コーディネーター

地域の課題解決に向けて、地域住民や活動団体等にはたらきかけ、それらを結びつけていく、課題解決の仕掛け人。

お わ り に

2年間、「社会教育における子ども達の生きる力を育む方策について」取り組んだが、このテーマは、大人達にどう地域づくりをしていくのかを問いかけるものでもあった。子ども達の生きる力を育むために、また、地域の教育力を高めるために家庭、学校、地域の連携と協力が不可欠である。お互いの協力のもと、子ども達の育つ地域や人的環境がより豊かで温かさが感じられるところになることを願っている。

今後の課題として次のようなことが挙げられる。

- ・平塚市や市内の各地域における「子ども達の生きる力を育む活動」の推進
- ・家庭教育をサポートする社会教育
- ・放課後等の子ども達の過ごし方や居場所づくりの推進
- ・社会教育施設（公民館・図書館・博物館・美術館等）の有効活用

本提言が平塚市の「子ども達の生きる力を育む社会教育」に少しでも活かされ、お役にたてれば幸いである。

平成24・25年度 平塚市社会教育委員名簿

役職	氏名	分野	推薦母体
議長	大橋 千賀子	学識経験者	元小学校校長
副議長	山口 恵信	社会教育関係者	平塚市地域教育力ネットワーク協議会 (港地区青少年を守る会)
委員	府川 文子	学校教育関係者	平塚市立小学校長会 (神田小学校)
委員	鈴木 豊	学校教育関係者	平塚市立中学校長会 (太洋中学校)
委員	朝倉 徹	学校教育関係者	東海大学
委員	高橋 秀徳	社会教育関係者	平塚市PTA連絡協議会 (富士見小学校)
委員	川井 達郎	社会教育関係者	平塚市自治会連絡協議会 (横内団地連合自治会)
委員	柳川 久子	社会教育関係者	平塚市公民館連絡協議会 (金目公民館)
委員	石川 幹夫	社会教育関係者	平塚市文化連盟 (平塚謡曲連合会)
委員	沢野 政久	社会教育関係者	平塚市体育振興連絡協議会 (旭南地区体育振興会)
委員	川口 雅子	家庭教育関係者	平塚市民生委員児童委員協議会
委員	跡部 左恵	家庭教育関係者	平塚市子ども読書活動推進協議会 (横内中学校区子ども読書活動推進協議会)
委員	長本 貞光	学識経験者	元小学校校長
委員	寺山 泰郎	学識経験者	公募市民委員
委員	伊藤 重義	学識経験者	公募市民委員

事務局 平塚市教育委員会 社会教育部 社会教育課